

1

「不安」から「ヴィジョン」へ

ドイツ市民運動と福島との接点

チェルノブイリ後の3つの影響

母親たちの生活
防護イニシャチブ

リスク認識と
(不)公平性

公平な世界のヴィジョンを持つための学び：
ESDへの示唆



©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

2

『フクシマ』の事故は、絶対にありえないものと考えられてきたリスクが、完全にありえないわけではないということを、私に教えてくれました。」
(2011年3月14日のメルケル首相の演説)

序.「フクシマ」がドイツにもたらしたもの



©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

3

2011年3月14日 脱原発への「区切り目」宣言



『原発稼働延長法』を事実上3ヶ月間棚上げ、古い原発7基を緊急に停止、事故の可能性を検証。さらに原子力発電からできるだけ早期に撤退すると宣言

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

4

2011年3月26日 ベルリン官邸前反原発デモ



梶村太郎「明日うらしま」 (<http://tkajimura.blogspot.jp/2011/05/blog-post.html>) より

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

5

2011年3月26日 ベルリン官邸前反原発デモ

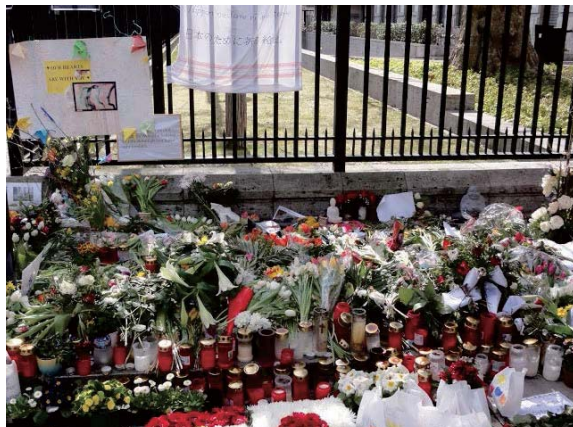


梶村太郎「明日うらしま」 (<http://tkajimura.blogspot.jp/2011/05/blog-post.html>) より

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

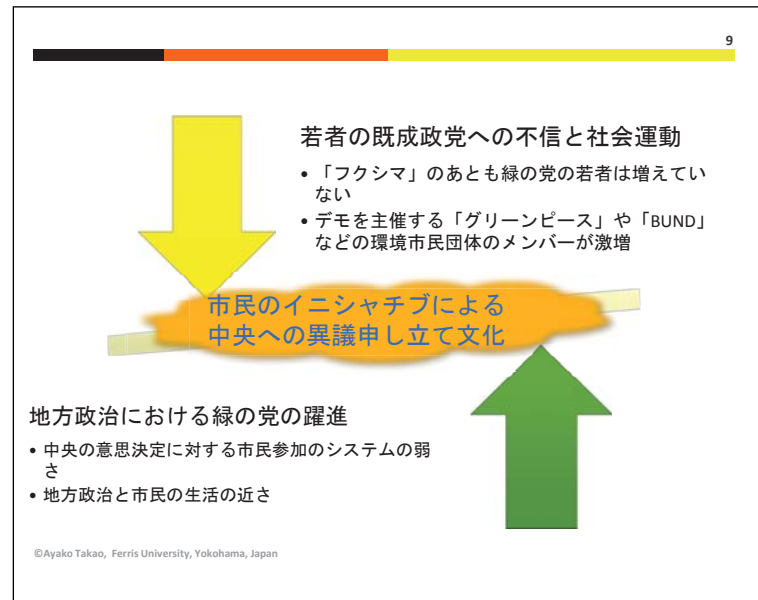
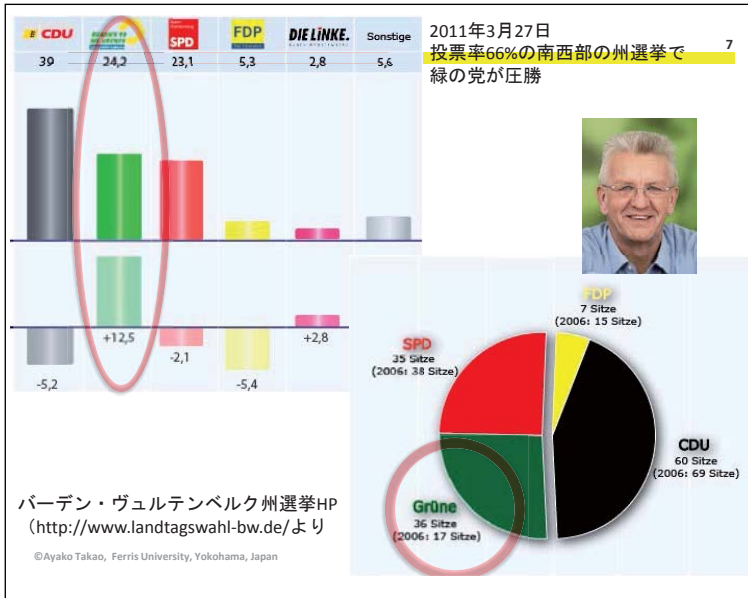
6

2011年3月26日 ベルリン日本大使館哀悼の花束



梶村太郎「明日うらしま」 (<http://tkajimura.blogspot.jp/2011/05/blog-post.html>) より

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan



10

市民のくらしの混乱

- できるだけ保存期間の長い食品を選ぶようになった。チェルノブイリ後は**全く違う食習慣**を送らなくてはならなくなった。
- 無力感**にさいなまれ、ミルクの代わりに豆乳、新鮮な野菜の代わりに去年の冷凍野菜、地下室には粉ミルクを常備した
- 子どもが外遊びするときは時間を制限し、砂場は避け、自宅ですぐにシャワーを浴びさせた。

(genanet, Röhr, U.,「反原発活動をする女性たち」2006)

チェルノブイリ後の3つの反応

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

11

いのちや健康にかかわる科学的基準が政治によってバラバラ

各州の牛乳のヨウ素131の基準値

ベルリン市州・ザールラント州・ブレーメン市州: 100(Bq/リットル)

ハンブルク市州: 50(Bq/リットル)

ヘッセン州: 20(Bq/リットル)

バイエルン州: 基準なし

- 各基準値の違いは、州の汚染量の高低によるものではなく、各州議会の**政治勢力**の影響によるもの
- ヘッセン州: 前年にドイツで初めて社会民主党 (SPD) と**緑の党**の連立政権が樹立。
環境・エネルギー相に緑の党のヨシュカ・フィッシャーが就任。**反原発を政策的に重点課題とする革新自治体。**
- バイエルン州: 保守の牙城。政府の基準を遵守。
- 連邦健康相 (当時) 「牛乳や野菜の流通を妨げる独自基準は控えるべき」

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

12

政治とくらしの境界が崩壊したことによる市民の3つの反応

- 怒りの表現の強化
- 不安の表明と共有
- オルタナティブなヴィジョンの提示

- 70年代の女性運動スローガン「**私生活は政治的である**」への新たな意味の付与
- 「**帰る場所**」であるくらしを奪われた女性達の連帯
- 既存政治と異なる視点からのライフスタイルの提案と実践

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

1. 怒りの表現の強化

「私生活は政治的である」への新たな意味の付与



梶村太一郎「明日うらしま」(http://tkajimura.blogspot.jp/2011/05/blog-post.html) より

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

- くらしを取り戻すための政治的抵抗
- 原発や中間処理場の立地地域（地方）での展開



ゴアレーベン最終貯蔵施設候補地での建設反対運動の中心人物マリアンネ・フィリッセン氏（1924年生まれ）

2. 不安の表明と共有

「帰る場所」であるくらしを奪われた女性達の連帯

- 小さな子どもを持つ親たちが中心となり、食品や環境注の放射線濃度を測定し公開する、非中心的・自助的グループ



独立系放射線測定所/放射線レベルの測定風景(右)と、測定結果を買い物に持参する客(左上)

広河隆一。(2011年7月). 特集：福島の方。DAYS JAPAN, 21.より

「怒り」を抱く人と、「不安」を抱く人が結びつく

1970年代から脈々と続く反原発運動の「怒り」の現場に、都市部の市民が大半して押し寄せた。

ヴァッカーズドルフ再処理施設：レーゲンスブルク、ミュンヘン、ボン、フランクフルト

ゴアレーベン最終処分場：マクデブルク、ハンブルク、ブレーメン、ベルリン、

- 「不安」を持つ女性は主に都市部在住、消費者、インテリで、我が身に降りかかるリスクに反応。
- 都市部の女性が持つ「不安」は、「怒り」の現場である地方が受け入れ先となった。
- フランスとは異なる展開
- 日々の生活で「不安」を持つ事の正当性を獲得。
- 反原発運動が全国展開する。

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

チェルノブイリ後のドイツの経験から判断するに、市民が独自の測定所を設置した地域では、市も測定活動を始めています。

「ドイツ放射線防護協会より横浜の保護者の方へ」（横浜ママパパの放射線便りhttp://yokohama-konan.info/tomas.html）

母親達の生活防護イニシャチブ

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

市民グループによる独立測定の開始

全国で40カ所以上の市民グループ。小さな子どもを持つ母親たちと、物理学や生物学の専門知識を持つインテリ層が中心。



©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

市民測定グループ	都市	州
独立系放射線測定所/放射線レベル	ベルリン	ベルリン
放射線レベル	ベルリン	ベルリン
汚染されていない食品を求める消費者の会	キール	シュレスヴィヒ・ホルシュタイン
人間自然研究所	フェルデン	ニーダーザクセン
放射線測定技術協会	ミュンスター	ニーダーザクセン
残余リスクに対抗するエムスラント親の会	リンゲン	ニーダーザクセン
ガンマ測定所	ケルン	ノルトライン・ヴェストファーレン
残余リスクに対抗する親のイニシャチブ	ヴィーバーデン	ヘッセン
ミュンヘン環境研究所	ミュンヘン	バイエルン
土壌と植物	ケーニヒスドルフ	バイエルン
MGA フリューステン	カウフボイレン	バイエルン
フルトブルック		

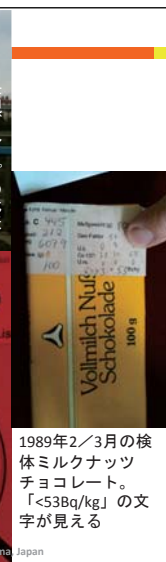
チェルノブイリ後に発足した主な独立系市民測定グループ

母親の不安と専門家の知識の融合

- 1986年の初夏、3児の母でオペラ歌手のエリザベス・ウミエルスキーさんは、政府の対応に不信感をき、事故後1週間後から母親達のグループで汚染されていないミルクの共同購入を行っていた。

- 物理学者ヴェルニック博士は、行政の食品測定の現状に満足せず、民間研究所の測定器で測定していたが、市内の流通食品の獲得に苦心していた。

- この2人が会うことによって、母親のニーズと科学者の専門知識が結びついた独立の市民放射線測定所の構想が持ち上がる。



1989年2/3月の検体ミルクナッツチョコレート。「<53Bq/kg>」の文字が見える

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan



「放射線防護協会」の編集長デルゼー夫妻

19

市民目線で公的機関の情報 の不十分さをカバー

- 公的機関の測定では、商品名、工場名などの詳細な情報は記載されない。
- 西ベルリン市（当時）の場合、月に約2,500サンプル以外の食品はノーチェックで流通
- 市民測定所は、スーパーに流通している商品を対象に、**商品名、原産地、製造加工日、製造者固有番号、メーカー名、販売店舗名も公開**
- 推奨する基準値も、公的機関よりもかなり厳しい。（大人8Bq/kg、子ども4Bq/kg）

『放射線リスト』から抜粋（1987年1～3月、単位はすべてベクレル/kg）

1987年	基準値100Bq/kg超え食品の例
1月26日	ベビーフード(182)
2月2日	パスタ(107)
2月9日	牛乳(187-305), 生クリーム(211-293), ハーゼルナッツ(211-293)
3月2日	フランス産ハーブティー(4485)
3月23日	チーズ(132), パスタ(118)

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan



20

地方行政レベルの 政治的「混じり合い」

ヘッセン州は1987年のCDUへの政権交代後、行政の測定が2週間に1度になり、基準値が20から**630Bq/kgに引き上げられた**。EC基準値600Bq/kgすら上回る。

ヘッセン州では前政権のSPD/緑の党が環境政策に熱心だったため、政党政治に対する**市民の信頼が高く**、市民測定所が活発化しなかった。

市民測定が活発なベルリン市では、行政の測定が**強化された**

- 測定結果を毎日地域紙に掲載
- サンプル数が増加

市民測定所の活発でないヘッセン州では、行政の測定も**緩められていった**

- しかし2年あまりで解散が相次ぐ。
- 目的達成による解散。
- 目に見える政治的帰結には至らず、「生活に戻って」いった。

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

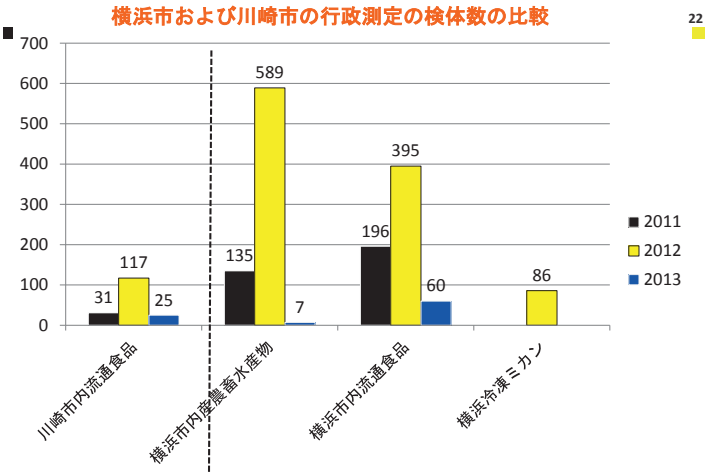


産経新聞2012年3月5日



東京新聞2012年2月20日

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan



横浜市: 横浜市で実施した食品の放射性物質の検査結果について
<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/syoku-anzen/00/>
川崎市: 食品の安全性HP
<http://www.city.kawasaki.jp/350/page/0000032059.html>

22

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan



23

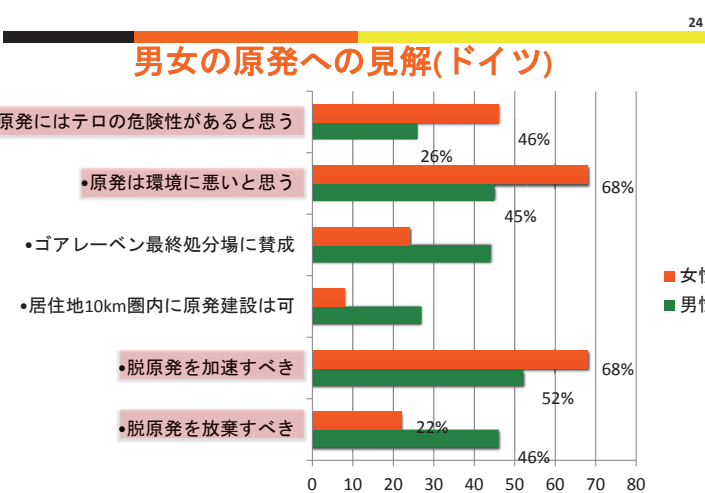
リスク認識と(不)公平性

なぜ女性達はリスクに敏感に反応したのか

■女性達は負担によってではなく、むしろ、自分が**日常的ケアを正しく行えないと感じる**状況で、家族の心身の健康を心配しなくてはならない事を**社会的に押しつけられた**ために、「見捨てられた」と感じたのである。

(Schultz, 「社会的エコロジー研究プログラムのためのヘッセン州の現状調査」1987)

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan



Greenpeace Magazine, 2005, Ergebnisse der Emnid-Umfrage zur Einstellung der Bevölkerung zur Atomenergie

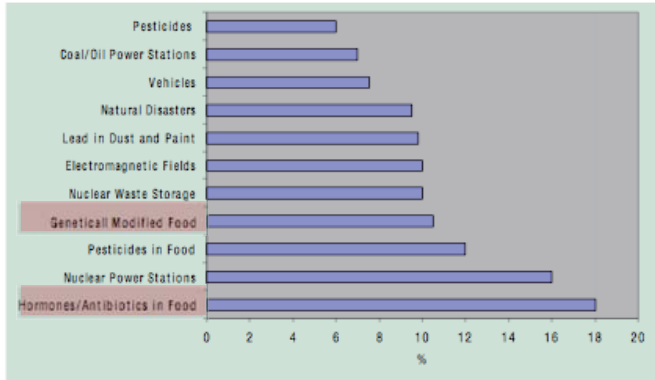
24

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

25

リスク認識のジェンダーによる違い

Gender differences in risk perception (Finucane 2000)



©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

Finucane, M.L. / Slovic, P. et al. (2000): Gender, race, and perceived risk: the 'white male' effect. In: Healthy risk and society, Vol. 2, No.2/2000, pp.159-172

26

なぜ女性のリスク認識は高いのか

この理由は長いこと、女性の社会化のプロセス(Sozialisation)と、健康への責任感(育児などによる)と思われる。

最近はそのに加え、リスク認識は、意思決定への影響度合い、およびリスクの制御とかかわっているとする研究が増えてきている。

➤意思決定に影響を及ぼす可能性が低いほど、リスク感覚は鋭くなる。

➤女性の権限や影響力は原則的に男性よりも制限されているため、このような大きな差が出てくるのではないかと説明できる (Slovic, 1999)

一般的にリスク認識の度合いの高さ(性差、教育、収入、人種等カテゴリーごと)

白人男性

白人女性

黒人男性

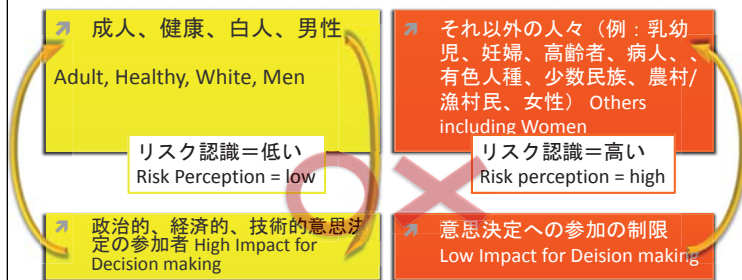
黒人女性

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

Slovic, P. (1999): Trust, emotion, sex politics, and science: surveying the risk assessment battlefield. In: Risk Analysis, Vol.19, No.4

27

意思決定に対する社会的カテゴリーによる「不公平性」がリスク認識によって顕在化する



©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

Slovic, P. (1999): Trust, emotion, sex politics, and science: surveying the risk assessment battlefield. In: Risk Analysis, Vol.19, No.4

28

核技術の持つリスクのタイプ = 不確実性

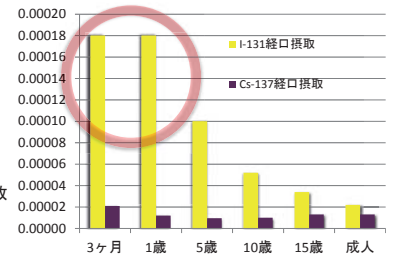
■ 五感で感じられない汚染

■ 日常で聞き慣れない単位

■ 「平均的な人間」をもとに産出される安全基準値(男性、健康体、大人、妊娠していない等)

「においも、味もしない、色もない汚染」というものは衝撃的だ。測定器で放射能を測らなければわからない。」

(反原発運動家レーネ・マイヤーへのインタビュー、genanet, Rohr, U.「反原発活動をする女性たち」2006)



©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

年齢別実効線量係数:ICRP (国際放射線防護協会、1990年)

29

公平性の欠如に対抗するリスク認識の他の要素の獲得

国民によるリスクの程度の認識は、数字で示されるデータ以外の多くの要素の影響を受ける(リスク認識の6要素)

公平性が担保できないリスクに対し、「不安」をベースとする測定ムーブメントでは、普通の主婦が放射線や測定技術を学ぶことで、制御可能性、既知性の獲得が目指された。

➤ 自覚性(自己責任)

➤ 制御可能性

➤ 利益性

➤ 公平性

➤ 価値共有性

➤ 既知性

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

Fischhoff B, Lichtenstein S, Slovic P, Keeney D. (1981): Acceptable Risk. Cambridge, Massachusetts: Cambridge University Press.

30

不確実なリスクをめぐるコミュニティでの学習プロセス

➤ 小さな子どもを持つ母親や妊婦など、脆弱性の高いグループはリスクを高く認識する傾向がある。

➤ しかしこのようなグループは通常、コミュニティ政策の意思決定に関与する割合が低い。

➤ 疎外された状況から方向感覚を失い、再び高いリスク認識に至る悪循環に置かれている。

➤ しかし、チェルノブイリ後の市民測定活動は、このグループの人々を、次の行動に向けてエンパワメントする学習プロセスとなった。

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

31

学習プロセスで獲得された「方向性の知」

- 多様なアクター間の行動や状況の複雑な相互作用を考慮しつつ、ある程度不確実性に対処できるようになるための学習は、社会の行動範囲を規定する「**方向性の知**」を生み出す。
- 不完全で不確実な状況においても無力感に陥らず、そこから問題解決に向けて最大限の有効な情報を引き出し、方向感覚のように次の行動指針を自ら作り出すことのできる能力
- これは、コミュニケーションプロセスに参加する人々の**個人的、社会的視点が配慮された（ホリスティックな）学習環境**でのみ、獲得が可能なるものである。

Evers, A., Nowotny H. (1987). Über den Umgang mit Unsicherheit. Die Entdeckung der Gestaltbarkeit von Gesellschaft. Frankfurt: Suhrkamp

32

不確実なリスクに対する方向性の知

普通の主婦が放射線や測定技術を学ぶことで、既知性、制御可能性の獲得が目指された。

地方行政への混じり合い

食品安全行政に対する監視役・コンローラーの役目を果たした。

女性が「不安」を持つ事の正当性を獲得し、放射線からの生活を防護する世論を形成していった。

オルタナティブな公平性のビジョンを構築

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

33

チェルノブイリ後の女性の反原発運動がドイツの社会や科学に及ぼした影響

- 脆弱性の高いグループを考慮した規制科学(レギュラリ・サイエンス)の見直し
- リスクコミュニケーションにおける参加アクターの多様化
- 学際的な社会エコロジーの分野の誕生
- 多様なくらしの経験知の協働

Schultz, I. (2006): Frauen aktiv gegen Atomenergie – Spuren in der Wissenschaft. In: genanet, Röhr, U.: Frauen aktiv gegen Atomenergie – wenn aus Wut Visionen werden.

公平な世界のヴィジョンを持つための学び：ESDへの示唆

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

34

ESDグローバル・アクション・プログラム (GAP) 2014

- 2015年以降の5年間、ESDは**持続可能な開発目標 (SDG)**と**人間の安全保障**の前提の中で進められ、ESDは持続可能な開発(SD)を加速するという目的をもつGAPによって行われます。

5つの優先分野

- 政策的支援
- ホリスティック（機関包括型）・アプローチ**
- 教員、指導者
- 若者、子ども
- コミュニティ開発**

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

Women in action:

35

女性達がコミュニティで多様なアクターと連携して行ってきた反原発運動が...



不確実性に対する「方向性の知」をもたらした

36

3.オルタナティブなヴィジョンへ

持続可能な価値観の提案と実践

- 市民が自発的に、草の根の再生可能エネルギー自治を獲得

- 原子力のない未来のための親の会→シェーナウ電力会社の設立



2011年ゴールドマン環境賞受賞ウルズラ・スラーデック氏 (ジャンル:持続可能性、シェーナウ電力会社)
<http://www.goldmanprize.org/2011/europe>

©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan



- ©Ayako Takao, Ferris University, Yokohama, Japan

ご静聴ありがとうございました。

フェリス学院大学 国際交流学部
高雄綾子
takao@ferris.ac.jp

